

『沖縄 うりずんの雨』

2015年06月22日

岩波ホールで上映されている『沖縄 うりずんの雨』を観に行った。ジャン・ユンカーマン監督が戦時中から現在までの沖縄の歴史を記録映像とインタビューで構成した、長編ドキュメンタリー映画である。歌人の小嶺基子氏は「うりずんの 雨は血の雨 涙雨 礎の魂 呼び起こす雨」と詠んでいる。「うりずん」とは潤い初め（うるおいぞめ）が語源とされ、冬が終わって大地は潤い、草木が芽吹く3月頃から、沖縄が梅雨に入る5月くらいまでの時期を指す言葉だそうである。「4月1日から始まった沖縄地上戦がうりずんの季節と重なり、戦後70年たった現在も、この時期になると当時の記憶が甦り、体調を崩す人たちがいることから、沖縄を語る視点のひとつとして、本作のタイトルを『沖縄 うりずんの雨』とした」と説明している。重く長い沖縄の悲劇が丁寧に描かれている。

4部構成で、第1部は「沖縄戦」。沖縄戦は住民を巻き込み、4人に1人が死んだ悲惨な戦争であった。元沖縄県知事の大田昌秀氏は下記のように語っている。「戦争が終わった後は、何で自分が生き延びることが出来たか、今もって分からない。ある意味で、生かされたのかなという感じがするので、余生は死んだ人たちをどうすれば慰めて、同じ間違いをしない、無駄な死にさせないために、生きてきたようなもんで、片時も、戦争の犠牲者を忘れたことはない。ですから戦争の、その…後遺症と言いますかね。これは、今も我々には続いていてですね。戦争体験者は今も、沖縄戦は続けているという言い方をする。私も本当にそう思います。」

第2部は「占領」。戦後、沖縄は米国の施政権下に置かれた。日の丸を降ろして焼いた知花昌一氏は現在、僧侶をしている。知花氏は沖縄返還について下記のように語っている。「佐藤・ニクソン会談があって、復帰が決まるんです。“ああ、日本になるんだ”と嬉しかった。みんな喜んでですね。…ところが、私たちが望んでいた復帰というのは基地もない、核もない本土並み返還というのが、僕らの求めていた復帰だった。ところが、復帰が決まってから、復帰までの間に“えっ、こんな復帰なの？と。おかしいじゃないか”というのがあって。というのは、基地を残すために復帰したと。施政権を、政治をする権利を日本に返す、ということになったわけです。」

第3部は「凌辱」。12歳の少女が強姦され、8万5千人の抗議集会が持たれた。強姦した3人の米兵の内、ロドリゴ・ハーブがインタビューに応じている。「神の許しなどより、彼女は本当に許してくれるだろうか。世間が許してくれることはないだろうが、彼女はゆるしてくれるのか。もし許されたとしても地獄行きは変わらないです。すべきでないとかかっていることをしてしまったのだから。教会に通っている。お許しをと祈っています。でも許しを祈っても、どのみち地獄に落ちるんだ。僕はそう思います。いつもそう考える。」兵隊は心が荒れて、自制できなくなる。軍隊内での性犯罪は止まることがない。

第4部は「明日」。安里英子氏は下記のように語っている。「女性だけじゃなくてね、沖縄そのものが…やはり…こう…凌辱されているっていう。大きく言えば、っていうことなんですよ。今の基地問題だって、やっぱり…当たり前人間として、扱われていないっていう思いが、怒りですよ、があります。」

悲惨な映像と重いインタビューで、上映後、観客はしばらく立てないでいた。ジャン・ユンカーマン監督に感謝し、サインをもらい、握手して帰った。本土に住む我々は沖縄の現実とどう向き合うのかが問われている。